短篇集

妻

丹羽文雄

講談社

短篇集　妻（つま）

一九八二年一一月二四日第一刷発行

著者――丹羽文雄（にわふみお）

© Niwa Fumio 1982 Printed in Japan

発行者――三木章

発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―三―二　郵便番号一二三　電話東京〇三―九四五―一二一（大代表）　振替東京六―五九三〇

印刷所――豊国印刷株式会社　製本所――藤沢製本株式会社

定価――一、三〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN4-06-200186-1（0）　（文1）

目次

春の蟬　5
妻　43
沈黙　67
鳥の影　97
わが家の風物詩　121
悔いの色　145

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

短篇集

妻

装画・坂倉新平
装幀・山岸義明

春の蟬

二階の部屋を歩くと、階下の茶の間がみしみしと家鳴り震動をした。妻が思わず首をすくめるという。大げさだと私は思っていた。日本家屋は三十年が経つと、修理に手を入れなければならないといわれている。建物は、昭和十五年に建築された。私が建てたものではなかった。四十一年も経過すると、二階の床の間と書院窓のつぎ目に、すきまが出来た。地袋が傾斜して、何度戸を直しても、すぐしまらなくなった。床の壁にも、すきまが出来た。書院窓のはめこみの障子が風もないのに外れて、廊下に大きな物音をたてた。机に向っていた私は、息がとまるほどにおどろいた。たまたま私が階下の茶の間にいたとき、たれかが二階の書庫にはいった。みしみしと鳴り、いまにも天井が落ちてくるような音をたてた。首をすくめるという妻の苦情は、誇張ではなかった。それは恐怖をはらんだ音であった。

玄関の石造りや、家のまわりが頑丈に出来ていたので、私はだまされていた。四十一年が経過すると、家の中の目にみえないところで、たがが緩んでしまった。あとからつけた

暖房のせいもあった。工務店主を呼んで、見てもらった。
「全部こわして建て直す必要はありません。半分だけの改築ですむでしょう。二階は大分痛んでいるようです」
「せめて七月まで待てないかしら」
毎年七、八月は、佐久の山荘にこもって、小説を書く習慣であった。
「ちょっと大きな地震が来たら、危険です」
私も覚悟をきめねばならなかった。
幸い手をつけなくてもよい部屋が、三つ残ったので、大部分の家財道具をそこに蔵った。が、引越となると、三トン積みのトラックに山ほどの荷を積んだ。
娘の一家が近所に住まっていたので、わが家の解体のもようは電話で逐一報告をうけた。
「大工さんが床をはがしてみたら、根太がすっかり外れていて、すこし大きな地震が来たら、ひとたまりもなかったろうといってたわ」
私は、慄然とした。知らぬが仏であった。日ごろ仕事の上で、仏とは親しくしていたが、仏には地震を予告する能力はないものであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

終戦後、私一家は疎開先の栃木県から引きあげてきた。友達の家を買って、しばらく友達の家族と同居していた。武蔵野の面影が多分に残っている一画であった。屋敷町であり、車もほとんど通らなかった。私は、よく散歩に出た。近くに化け物屋敷といわれている家があった。鬱蒼と庭樹が茂っていた。何年も庭の手入れがされていないようすであった。二階の雨戸のあいているのを見たことがなかった。家人の顔にも接したことがなかった。

ある日、小柄な老人の訪問をうけた。近所の萬と名乗った。化け物屋敷の石の門柱にかかげてある名前であった。

「私の家を買いなさい」

買いなさいとは、命令であった。社長が社員に心やすく命令する調子であった。初対面の老人である。私はおもしろい老人だと、気持には余裕があった。家族の頭数に比例すると、いまの家は手ぜまであった。いますこし大きな家をという希望はあったが、差しせまっての困惑ではなかった。

「あなたほどの有名人が、こんな小さい家に住んでいるのは、おかしいですよ」

私は苦笑した。マスコミに多少名が知られているとはいえ、有名人扱いはおかしかっ

た。

「とにかく一度私の家を見なさい」

妻に伝えると、妻は興味をもった。

私たちは老人につれられて、化け物屋敷を見にいった。玄関にはいって、そこの大きさにおどろいた。かまちや階段の造りをみて、まるで町の開業医の玄関のようだと思った。十畳ほどのひろさであった。寺院に生れた私は、部屋の大きさにはおどろかない方であったが、庫裡のひろさとはちがって、素人家の玄関の大きさが意外であった。老人が部屋部屋を案内した。階下の茶の間と次の部屋を、廊下がぐるりととりまいていた。そこには立派な床の間がついていた。

「いたるところの廊下の天井の戸棚が、自慢ですよ」

廊下の天井の左右に、戸棚がついていた。家の中をあちらこちらと案内されているうちに、出口を見失ったような気持になった。

「総栂普請です。檜より一段上です」

栂はマツ科の常緑樹で、深山に自生する喬木であった。あとで知ったが、萬氏は深山のある地方の出身で、建築材料を郷里から取りよせたという。戦時中は軍部に関係してい

て、建築の基礎工事には、少尉が部下をつれてやって来た。
萬氏が戦犯であることを、私はそのとき知った。パージの身の上であり、収入の道を断たれていて、家を売ることになった。商売人の手に渡すよりはというので、私に白羽の矢をたてた。
萬氏が、売値をいった。私はとびつくような顔をしなかった。二、三日経って、また老人が現れて、売値を下げた。私の気持が動いた。
「灯籠が三つありますが、いちばん小さい灯籠は持っていきます。社長をやめるとき、記念として社員一同から贈られたものです」
私は承知した。
「網戸はあとからつけたものです。それは別に買って下さい」
「どうぞ持っていって下さい。網戸はいりません」
収入皆無な萬氏にしてみれば、一円でもほしいところであったろうと、あとになって気がついた。いざ移るとなると、浴室と台所が使用に耐えないほど腐り、こわれていた。台所の床は抜け落ちていた。修理費にも困っていたようである。それを改築するために、萬氏に払った金額とひとしい金を使った。

戦争から敗戦となり、萬氏は社会的にも物質的にもたたきのめされていた。網戸くらい買い取ればよかったと、私は時折思い出していた。

それから三十年が経過した。

五月から、家半分の解体がはじまった。十月までかかるということであった。玄関と応接間は、そのまま残った。どこか英国風の感じのある、うす暗い玄関の雰囲気は、萬氏が最後の心のよりどころであったろう。それはそのまま、現在の私の心のよりどころとなっていた。家をこわすことが知れわたると、若い友達が口を揃えて反対をした。中には、記念にカメラにおさめると、わざわざ撮りにきたものもあった。

——玄関と応接間の、重厚な、うすぐらい雰囲気は、そのまま残すことにします。せめてそのことが、あなたに対する申訳になるなら……

私は、萬氏に言訳が出来ると思った。萬氏にとっては、功成り名遂げた記念の建物であった。

夏の二ヵ月、東京にいては、仕事が出来なかった。原稿紙に向っていると、汗でペンをもつ指がすべり、机上で肘がすべった。汗にまみれては、仕事にならなかった。冷房装置は、嫌いであった。

佐久の自然の美しさは、木々の芽ぶきどきと、紅葉の季節といわれていた。いずれも私は知らなかった。五月六日に、山荘に来た。高速道路が出来てから、東京のわが家から山荘まで、二時間半で来られるようになった。昔は、八、九時間もかかった。

峠を下りて、平地に出ると、こぶしが枝いっぱいに白くて、大形の花をつけていた。いたるところに咲いていた。山野に自生するとは知らなかった。近くの山の肌が、ところどころ桜が咲いたようにみえるのは、こぶしの花であった。道路脇のこぶしの大木が満開であった。自生であるのが、もったいないような気がした。その実が、小児のにぎりこぶしに似ているという。

山荘に着いた。庭にはいると、私は他人の土地にまよいこんだようなとまどいを感じた。山荘の記憶は、つねに、息がつまるほどの濃淡のみどりの世界であった。私は思わずみどりを探した。四十米ほどの喬木は、すべてまるはだかであった。枯木の林であった。蕭条たる風景であった。五月という季節には主人が現れないと、喬木たちは油断をして、化粧をわすれて、ぶざまな生のすがたをさらけてしまったようであった。楢、楡、楓、唐松、栗、雑木までが枯木すがたであった。苔は死んだ色をしていた。辛うじてみどりを探し出した。それは目隠しのため、人間の背丈ほどに成長をおさえられている樅の群であっ

た。それだけが力強い濃緑色であった。それだけが木々のみどりを固守していた。私と並んで庭を眺めていた妻は、ものをいわなかった。蕭条たる庭の風景に呆然としているようであった。

「そういえば、栄作通りには一台の車も走っていなかった。ひとりの人間も歩いていない季節ですね」

私は、うなずいた。栄作通りとは、佐藤栄作が総理大臣のときに出来た道路であった。

家の中にはいると、氷室にはいったようであった。五月とはいえ、山は四月の気候であった。たれもが冬装束であった。暖炉をもやし、ヒーターを入れた。私はいまだに信じられない気持で、庭を眺め直した。女松の肌も、さえなかった。雨が降ると、すぐに濡れて、七、八月にはそれが美しかった。頂上にわずかに葉をつけていたが、みどりともいいかねた。雨が多いので、女松も葉をそれほど必要としないからであろう。隣りの別荘が、嘘のように近くに眺められた。新しく発見した別荘もあった。七、八月にはみどりの茂みで、目がふさがれるせいであった。

夜は、密度の濃い暗黒の静寂であった。深山の夜であった。山の夜は、どこよりも深いようであった。二階の書斎で、私はおそくまで電気ヒーターを使った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com